

# 事例発表

## 地域との協働による高等学校 教育改革推進事業【地域魅力化型】

高知県立大方高等学校  
統括主任

浦田 友香

# 自然とうまく付き合っていくまち“黒潮町”



高知県

## 黒潮町

- ・高知県西部に位置する町
- ・人口約1万1000人（高齢者率45%）
- ・南海トラフ大地震で  
“最大震度7”、“最高津波高34m”  
の大津波が来ると想定されている
- ・防災思想「犠牲者ゼロ」のまちを目指している



## 高知県立大方高等学校



- ・全校生徒82名
- ・町内唯一の高等学校

# 国事業の推進体制

## 校内推進委員会

- ☆事業実施への協力
- ☆カリキュラム実施協力
- ☆各委員との協議への参加
- ☆報告書作成協力
- ☆各会議準備
- ☆アンケート集計・分析
- ☆プレゼン資料保管
- ☆報告書資料の保管
- など

**事業総括責任者**  
校長

- ・事業推進助言
- ・町との連携
- ・事業成果分析
- ・報告書様式 他

**事業推進責任者**  
教頭

- ・県教委との連絡調整
- ・各委員との連絡調整
- ・事業の進捗管理
- ・事業推進助言
- ・協議資料作成、情報発信推進等のとりまとめ 他

**事業予算責任者**  
事務長

- ・予算管理・予算活用

事業統括主任

**総 探**

- ・探究活動推進
- ・探究活動進捗管理
- ・カリキュラム開発等
- ・専門家、地域協働学習実施支援員との連携 他

1年担当

2年担当

3年担当

**各学年団教職員**

- 総探活動における生徒指導・支援
- 総探活動の記録、振り返りシート、ポートフォリオ管理 他

**地域学**

**地域学担当教員**

- 地域学における生徒指導・支援
- 振り返りシート、ポートフォリオ管理 他

**教務主任**

**進路指導主任**

- 行事・時間割調整
- キャリアパスポート管理

**地域協働学習実施支援員**

- 事業推進のコーディネート
- 協力人材の発掘

**各教職員**

- 教科における防災の取扱い
- 探究的な活動の展開
- 探究活動への支援

- 校内推進委員会出席者
- 事業推進協力者

# 発表の流れ

---

- 1 本発表の趣旨
- 2 令和3年度入学生を対象とした成果報告  
地域人や社会人を巻き込んだ学習について
- 3 令和3年度入学生を対象とした成果と課題について

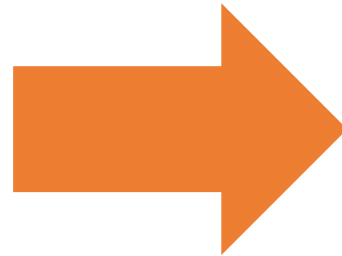
# 本発表の趣旨

## × Problem型

現在、目に見えている課題について考え、解決策を見出す学習

## ○ Project型

目に見えない未来の課題を考え、解決策にアプローチしていく学習



VUCA時代を  
生き抜く人材の育成

社会で求められる力の育成  
「学校」と「社会」の関係性



“学校軸”ではなく、  
“社会軸”で生徒の力を伸ばすカリキュラム開発

# 地域人や社会人を巻き込んだ学習のご紹介

## ☆学習活動

- ・ケーススタディ(1年次)
- ・アイデアソン(2年次)
- ・ワールドカフェ(1、2年次)

## ☆評価

- ・レポート課題の講評
- ・振り返り

4~7月

8月

9月

10月

11月

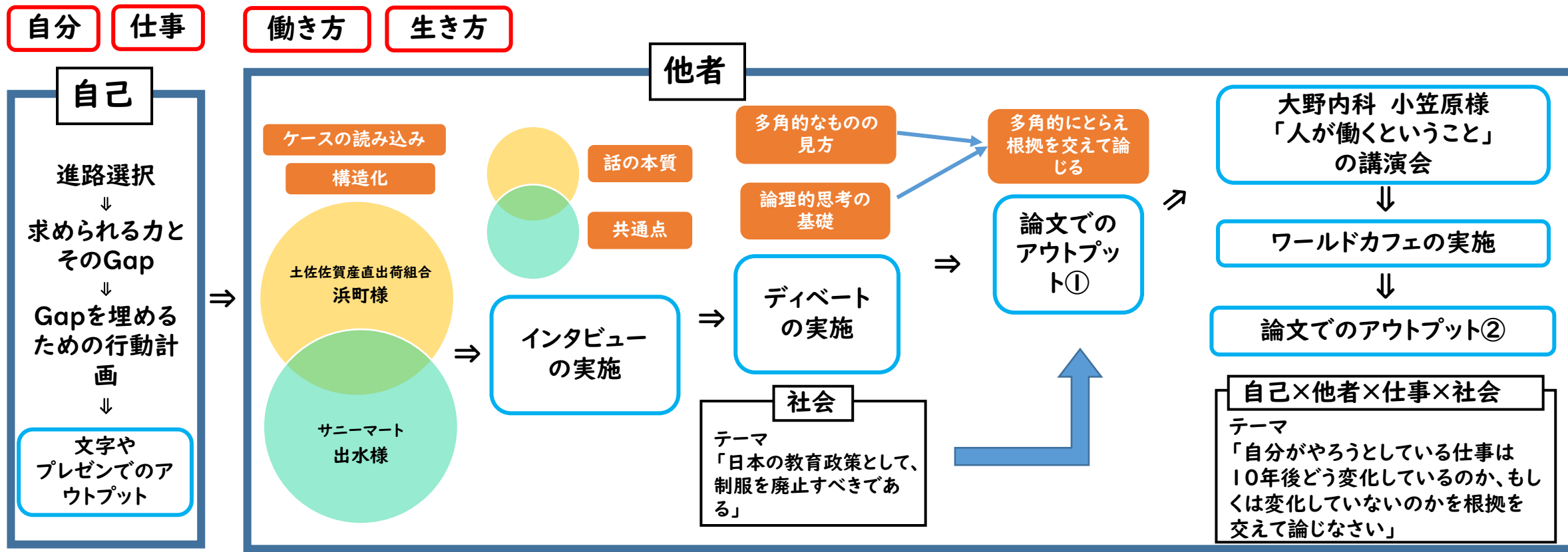
12月

1月

2月

3月

テーマ  
人が働くということ



評価



○情報収集の仕方  
⇒複数の情報源から情報収集する意味  
○情報分析の仕方  
⇒共通点探し、情報の本質探し  
○実現可能な目標設定、数値化(決定)  
○意識改革を促す発表



○情報収集の仕方  
⇒情報収集の方法とその性質(いい点、欠点)  
○情報分析の仕方  
⇒共通点探し、情報の本質探し  
○意識改革を促す発表



○情報収集の仕方  
⇒不足分の情報収集  
○情報分析の仕方  
⇒共通点探し、情報の本質探し  
○論文、発表での表現  
⇒1年間の学びを言語化  
⇒適切な言葉で語る





# 【他者×仕事】 ケーススタディ(1年次)

## 土佐佐賀産直出荷組合

—ひとりの女性が地域の特産品づくりの先駆者となるまで—

### 自分で会社をつくる

太平洋に面し、カツオの一本釣りでも知られる漁師町・高知県佐賀町(現黒潮町佐賀)で浜町明恵(はままち・あきえ)は生まれた。漁師の父が釣ってきた魚を「もったいない」と丁寧に調理する母の姿を見て育った明恵が高知の魚を売る仕事については自然なことだった。幼い頃から「魚に妥当な値がつかん」と口癖のように言う父の言葉が耳に残っていた。

ただ、順風満帆とは行かなかった。地元で勤めていた水産業者が倒産。業績悪化に伴って一人また一人と社員が減っていく時から、事務を担当していた明恵は持ち前の責任感の強さで会社に留まり、いつしか営業も販売も、会社のあらゆる業務に携わるようになっていた。最後は取引先へ頭を下げて挨拶回りまでした。「会社をたたくのにも相当なお金とエネルギーが必要。私が何とかしないと、やりきった」と、当時を振り返る。

特別な資格や技能を持たなかった明恵は「スキルアップせんと、これから仕事がないな」とパソコンを習い始め、同時に仕事探しを始めた。するとそんな噂を聞いた大阪の取引先から「独立しないか」と誘いがかかった。「できんできん。私が? どうやって?」思ってもみなかった起業の話に最初は戸惑ったが、「加工品をつくってくれたら販売の応援をするよ」と声をかけ続けてくれる根気に負け、地元の水産物や郷のたたきをバック詰めて売る仕事を一人始めた。

一人でやれる規模から事業を拡大するつもりもなかった明恵だが、唯一の取引先から「取引先がうち1社だけでは明恵さんの会社を支えていくには非常に責任が重い」と言われたことを機に、別の会社とも取引を始めた。1社だけと取引することで誠意を示せると考えていた明恵だったが、実際は売上を1社に頼ることがお互いにとって望ましくない状況だと理解した。指摘を受けて初めて気づくことだった。

「私は恵まれていたんです。」当時を振り返り、明恵は言う。「作ったものは、全部買ってもらった。販売先があるのは幸せでした。」それは、前職時代から築いてきた明恵の信頼関係の賜物であった。

## マージナリア 情報収集

## 構造化 問を見出す

## インタビュー





# 【他者×仕事】ワールドカフェ（1年次）

テーマ：未来の仕事について考える

概要：

前の单元「自分×仕事」で情報収集した、仕事や未来社会に関する内容をもとに、「**実社会においてどのような変化が起きているのか**」、「**これからの社会で求められる力とは**」について、社会人の方とディスカッションし、未来の仕事について考える

参加者：2年生33名

社会人：11名（高知県内の企業人の方、東京で働いている方）



※新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点より、オンライン開催

4月～7月

8月～2月初旬

2月中旬

# テーマ 残念な？黒潮町PJ～ものの見方を変え新たな価値を創造する～

**美術館**

**インプット**

個人学習

情報収集・分析

現場観察

小テーマ

↓

「物事に対する多様な価値観、視点の持ち方を学ぶ」

黒潮町役場

地域住民

大方の企業

視野を広げる

アイデアソン

**大方**

課題定義

個人→グループ

小テーマ

「2050年の黒潮町をデザインし、その実現に向け、近未来の黒潮町を町長に提案せよ」

2050年の黒潮町

2050年の社会

協働

黒潮町役場

高知県内企業

近未来の黒潮町

近未来の社会

私たちの思い

ワールドカフェ

多面的な情報収集

情報分析

**アウトプット**

グループ

町長提案に向けた模擬発表

↓

**町長提案**

未来の大方map

+

+

SDGs Sustainable Development Goals

企画提案のプロ

**評価**

表現

↑

分析/整理

↑

情報収集

○情報収集  
⇒読み込む力、追加での情報収集

○情報分析  
・構造化する力  
PJの企画、遂行、継続の視点

表現

↑

決定

↑

分析/整理

↑

情報収集

○情報収集・意思決定  
・高い視座を持つ必要性  
・多角的な情報収集  
・客観性、論理性  
・自身の考えを的確に伝える

○チーム力の必要性  
⇒役割・個々の力を活かす

表現

↑

決定

↑

分析/整理

↑

情報収集

○情報収集・意思決定  
・高い視座を持つ必要性  
・両義的なものの見方  
・多角的な情報収集  
・SDGsを意識した視点

○チーム力の必要性  
⇒役割・個々の力を活かす

○電子Bookの効果的な活用

# 【PBL導入】アイデアソン

テーマ：  
私たちのまちを守るアプリを企画せよ

参加者：本校生徒82名、高知商業高校生徒15名  
社会人50名

（役場職員、地域企業人、町内の義務教育学校の教員、歌手、  
Ory研究所研究員、東京の企業人）

ファシリテータ4名（高知大学、富士通ラーニングメディア）

評価者：黒潮町長、黒潮町教育長、高知大学次世代地域創造センター長





# 【2050年の黒潮町】ワールドカフェ

テーマ：未来の黒潮町について考える

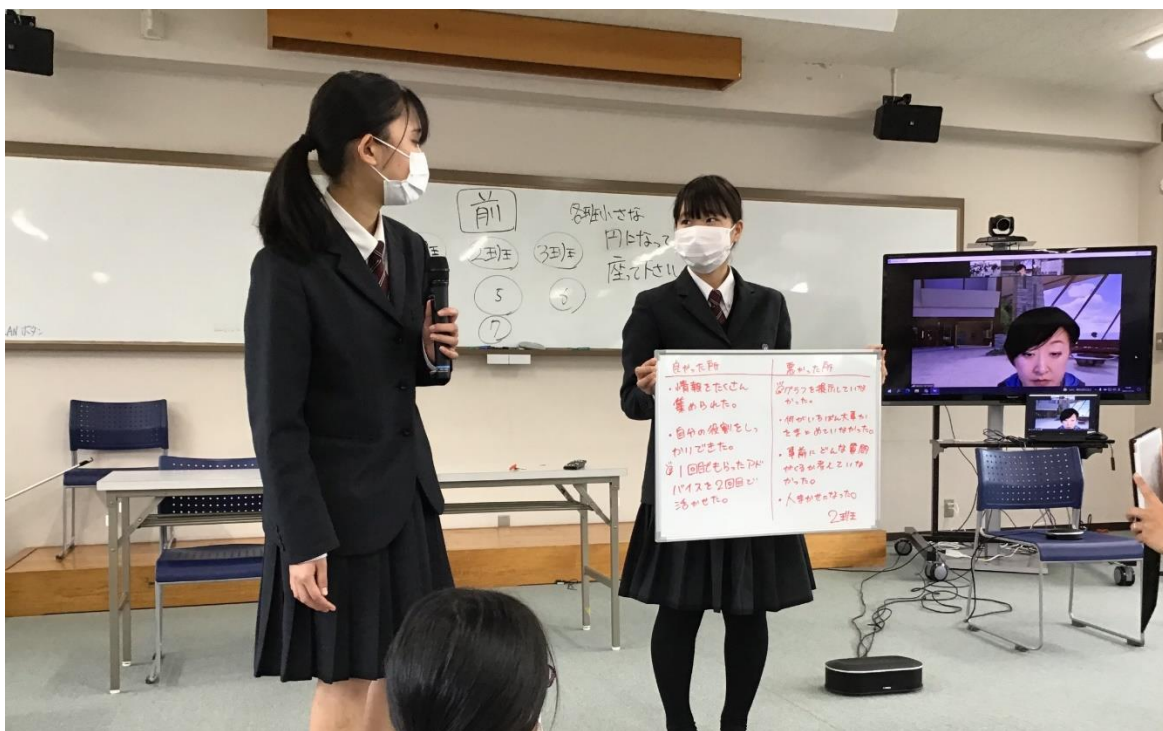
参加者：2年生32名、社会人12名（地域振興を専門とする社会人の方）

概要：個人でデザインした2050年の黒潮町を共有し、助言をいただく



# 【評価・振り返り】

コーチングの専門家をお招きしての振り返り



高知新聞社記者の方の課題レポート講評



「教員の視点」ではなく「**プロの視点**」を入れることで  
より充実した振り返りやフィードバックを実現できた



# 令和3年度入学生を対象とした成果と課題について

	生徒視点	教員視点
成果	<ul style="list-style-type: none"><li>・社会で求められている力の育成ができた</li><li>・向上心や自走性が芽生えた</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・グランドデザインの必要性や意味を理解し、設計できるようになった</li><li>・各分野での専門家とのつながりができた</li></ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"><li>・答えのない問に対して考え続けることが難しい生徒が一定数いる →パターン化された知識の獲得、アウトプットがベースにある</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・教育方法の変化を理解しようとしていない</li><li>・卒業後の生徒の生き方に興味がない</li></ul>

ご清聴ありがとうございました





# 參考資料

# アイデアソンとは？

---

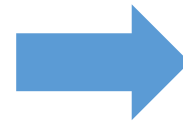
アイデアソンとは、**アイデア (Idea)** と **マラソン (Marathon)** を掛け合わせて造られた造語です。特定のテーマを決めて、そのテーマについてグループ単位でアイデアを出し合い、その結果を競うというイベントのこと



マラソン



アイデア

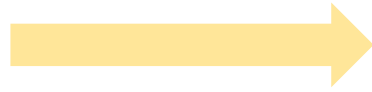


新しい発想

# アイデアソンと今後の活動

---

アイデアソン



PBL  
(Project Based Learning)

- ・課題抽出
- ・集合知の形成
- ・認知バイアスを外す
- ・多面的に思考

テーマ

残念な？大方PJ

私が描く未来の黒潮町map

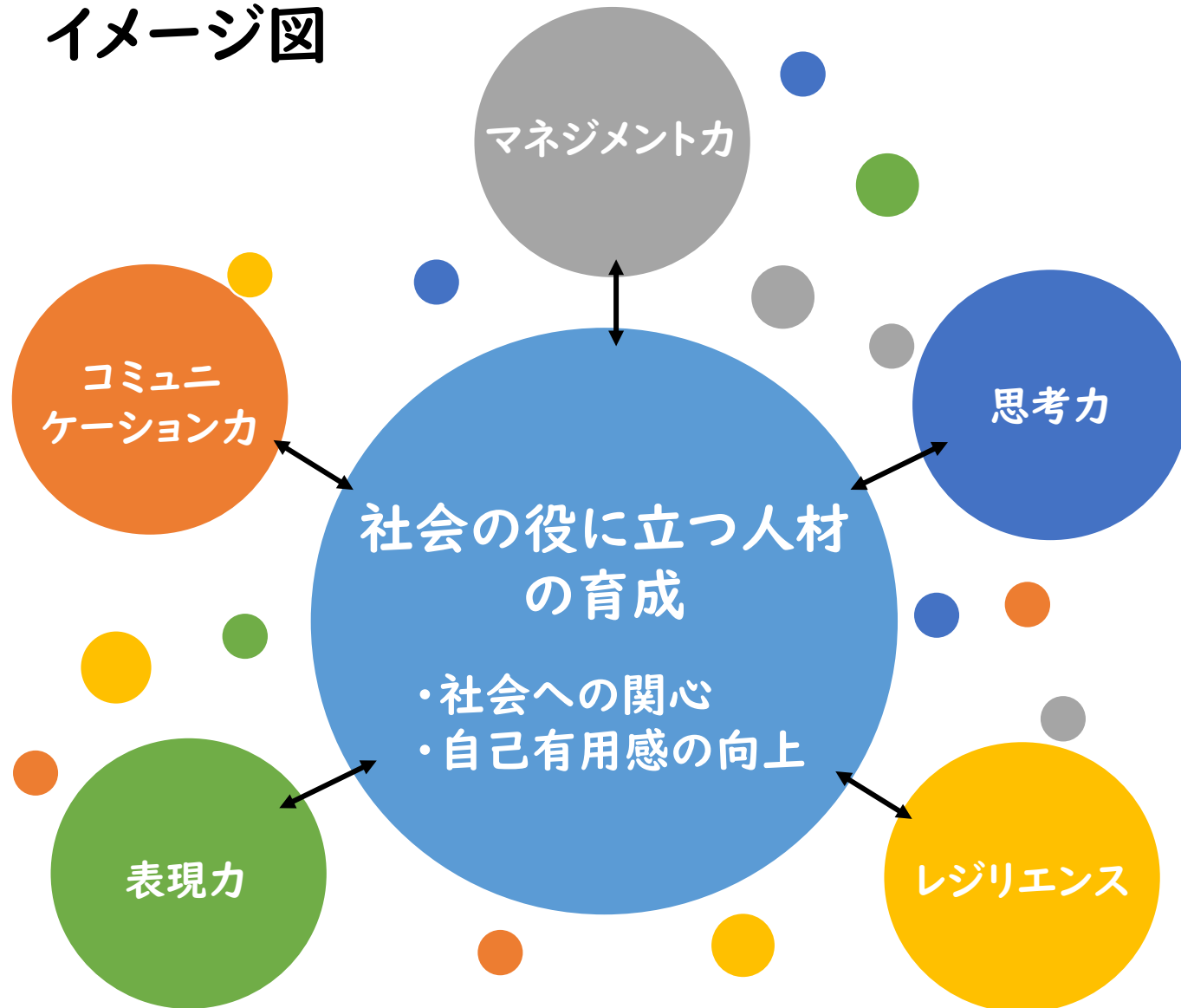
- ・ものの見方を変え、新たな価値を想像
- ・黒潮町にとっての Well-Beingを定義 etc...

# 「地域学」の地域貢献活動事例

- メモワール
- 避難路検証
- 避難所運営「オリジナルHUG」
- JICAとの交流

# 学校設定科目「地域学」の考え方

## イメージ図

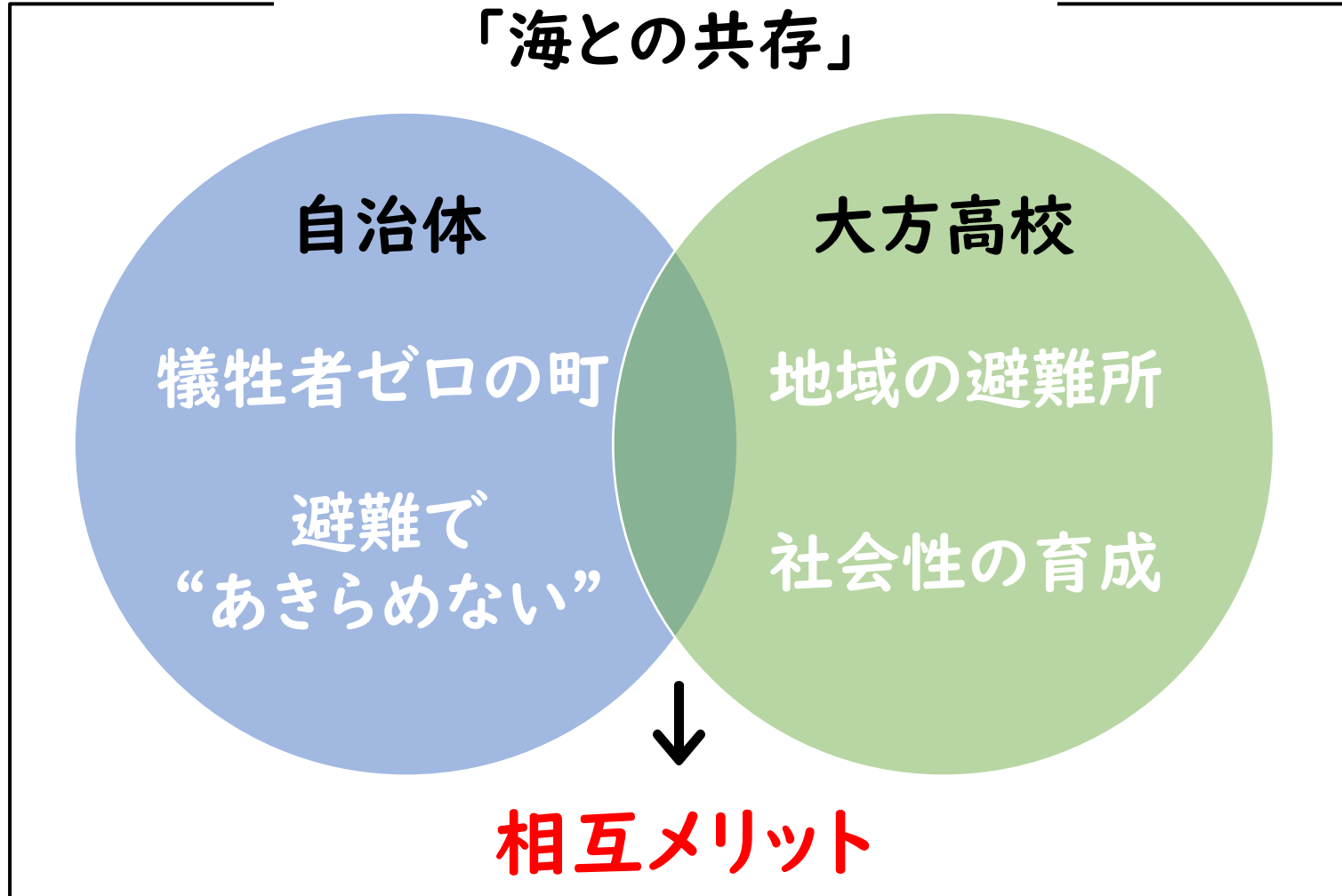


## ☆学習内容

- メモワール
- 避難路検証
- 避難所運営
- 「オリジナルHUG」
- JICAとの交流

# 学校設定科目「地域学」

黒潮町の町づくりの理念  
「海との共存」



町民全体で  
考える「防災」  
の実現に向けた  
カンフル剤

# 未来へのメモワール

未来へのメモワール
有井川（生まれ育ったところ）を残したい

<p><b>その理由</b></p> <p>なぜ有井川を残したいと思ったのかというと、私が生まれて15年間育ってきた所だからです。毎が目の前にあるので、地震や津波が来たらすぐに流されるし、家もいっぱい倒れると思うけど、でも、有井川というところがあったということだけでも残りたいです。有井川では、兄弟と川で泳いだり、友達と遊んだり、お正月にいとこや親せきが集まって楽しんだり、家族と過ごしてきた思い出があります。特に、兄弟と夏になると週に3回ぐらいい川に行った思い出は、もう兄弟は家にいないので、私のとても大切な思い出です。なので、そういう思い出の写真や資料を残していきたいです。そして、いつか災害が起こった後などに写真を見たり資料を見たり出来るようにして、その時はどんな気持ちになるのかはわからないけれど、今までの思い出を思い出せるようにしておきたいです。</p> <p>そして有井川を残すために、有井川の写真や動画が入っているスマホを残したり、家にあるフィルムカメラで写真を撮ったり、今まで撮った写真を避難所に事前に持っていったりして、対策をしたいと思います。</p>

未来へのメモワールとは・・・

『災害から守りたいものは何ですか？』

普段見落としがちで大切なものを見つめなおし、  
被災時に守りたいものを考えることで、**避難意識を高める**

※京都大学が黒潮町で展開 出前授業も実践



# 避難路検証

犠牲者ゼロを目指す

避難をあきらめている高齢者に高校生が呼びかける効果

高校生の呼びかけに答える高齢者の姿に自己有用感が向上



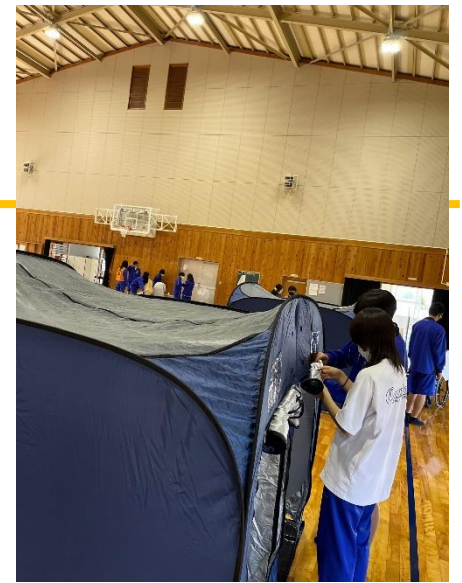
# 避難所運営訓練

犠牲者ゼロを目指す

避難後の誰もが安心できる避難所をともに考える  
『共助力』の向上を図る

避難所運営の率先者としての自己効力感の向上

※よりリアルな運営を目指し、『オリジナルHUG』を  
作製し、実践を重ねる



# 「地域学」の地域貢献活動の成果と課題

# 成果と課題

---

## 【成果】

- ・黒潮町と大方高校との連携が相互に効果を生み出していることから  
コロナ禍の状況下にあっても継続した活動が行われた。
- ・住民からの大方高校への信頼度も向上している。

## 【課題】

- ・本事業開始以前から確立されていた、黒潮町や京都大学との連携した関係づくりやカリキュラム開発について、一部の担当者で担っている。  
異動に伴う関係性の維持が危惧される。

## 【対策(案)】

- ・授業者を固定せず、複数担当制の実現を図る。
- ・これまでの担当者に依存しない姿勢が求められる。